

研究による地域貢献とは本当に可能なのか

社会福祉学部 丹野傑史

1. 報告の趣旨

2017年12月27日に「公立大学法人長野大学ビジョン」が決定された。2018年1月9日は理事長より、ビジョンの実現に向け取り組んで欲しいとの挨拶があったとのことである(当日は所用により欠席)。しかしながら、いくら読んでもこのビジョンの中身が理解できないのである。例えば、研究の項には以下のように示されている。

VISION 2「研究」:長期的展望に立ち地域から世界につながる多様な独創的研究を推進
長野大学は、地域から地球規模に至る多様な独創的研究と、地域の課題を素材とした研究を展開し、その成果を教育と地域活動と地域ならびに世界の平和のために活かします。
グランドデザイン
1. 地域を主題とした世界につながる総合的な研究を展開する
2. 教員の自由な発想に基づく長期的視野に立った研究の推進と蓄積により、世界水準の研究をめざす
アクションプラン
1. 地域を主題とする研究の深化と教育・地域活動への活用

自分なりに「研究による地域貢献」の在り方として以下の3つを思いついた。

- ①【地域の課題】を研究主題として取り上げる(地域の課題解決が研究の目的?)
- ②研究者が設定した課題に取り組む場として【地域】を活用する(フィールドとしての地域?)
- ③研究者が研究に取り組んだ成果を地域に還元していく(成果の還元先としての地域?)

敢えて言わせてもらおうと、私は「研究による地域貢献」という言葉が好きではない。なぜ、「研究」と「地域貢献」をセットに考えなければいけないかが理解できないのである。例えば、社会学の研究であればフィールドとして上田地域を設定することは可能かもしれない。教育学でも【授業研究】が主であれば、地域の学校はフィールドとなり得る。

しかし、私の研究対象は【歴史】である。それも【肢体不自由養護学校(現特別支援学校)】の【実践史】である。長野県には2校の肢体不自由特別支援学校(歴史の流れを追うと3校)があるが、肢体不自由養護学校は複雑な歴史的背景を持つが故、県内の学校は私の研究対象ではない。つまり、私の研究は①や②にはなり得ないのである。では、③はならば、といたいところであるが、過去と今では時代も子どもたちの実態も全てが異なる(同じなのは学校で教育をすることくらい?)。何をどう頑張っても還元はできない。そもそも還元する必要性を感じない。

もちろん地域貢献をしなくてもよいとは思っていない。研究者がやりたいことをやれる時代ではない(過去にはあったそうだが)ことくらい、前任校で散々思い知っている。国立大学の第3期中期計画に多少コアに関わった限り、【自分がどう貢献するか】は考えていかなければならない時代であることは重々周知している。長野大学の人間である以上、地域等に貢献するのは当然であり、責務であると考えている。ただ、繰り返しになるが【研究】と【地域貢献】をセットにしなければならないことが苦痛なのである。

今回の報告は、その苦痛と向き合いながら、敢えて研究と位置づけてやってきたことの経過報告、そもそも何が苦痛であったのかを報告する機会とさせてもらいたい。

2. 今年度の研究概要(丸数字は上記、私が考えた「研究による地域貢献」に対応)

- 1) 通常学級におけるユニバーサルデザインの視点を採り入れた授業改善(①)
- 2) 新学習指導要領に対応した、通級指導における自立活動の展開と課題(②)
- 3) 自立活動の視点を踏まえたキャリア支援(②、個人)
- 4) 省察を重視したサービス・ラーニングの展開(授業研究, 自主研修, ボランティア活動)(③)
- 5) 養護・訓練の成立と展開に関する研究(個人)